

浅草公園

——或シナリオ——

芥川龍之介

青空文庫

1

浅草あさくさの仁王門におうもんの中に吊つつた、火のともらない大提灯おおじょうちん。

提灯は次第に上へあがり、雑沓ざつとくした仲店なかみせを見渡すようになる。
ただし大提灯の下部だけは消え失せない。門の前に飛びかう無数の鳩はと。

2

雷門かみなりもんから縦に見た仲店。正面にはるかに仁王門が見える。

樹木は皆枯れ木ばかり。

3

仲店の片側^{かたがわ}。外套^{がいとう}を着た男^{ひとり}が一人、十二三歳の少年と一し

よにぶらぶら仲店を歩いている。少年は父親の手を離れ、時々玩^{おも}具屋^{もちや}の前に立ち止まったりする。父親は勿論^{もちろん}こう云う少年を時々叱ったりしないことはない。が、稀^{まれ}には彼自身も少年のいることを忘れたように帽子屋^{ぼうしや}の飾り窓などを眺めている。

4

こう云う親子の上半身^{じようはんしん}。父親はいかにも田舎者^{いなかもの}らしい、
無精髭^{ぶしようひげ}を伸ばした男。少年は可愛い^{かわい}と云うよりもむしろ可憐な
顔をしている。彼等の後ろ^{うし}には雑沓した仲店。彼等はこちらへ歩
いて来る。

5

斜めに見たある玩具屋^{おもちゃや}の店。少年はこの店の前に佇^{たたず}んだまま、
綱^{のぼ}を上^おつたり下^おりたりする玩具の猿を眺めている。玩具屋の店の
中には誰も見えない。少年の姿は膝の上まで。

6

綱を上ったり下りたりしている猿。猿は燕尾服えんびふくの尾を垂れた上、シルク・ハットを仰向けあおむにかぶっている。この綱や猿の後ろは深い暗のあるばかり。

7

この玩具屋のある仲店の片側。猿を見ていた少年は急に父親のいないことに気がつき、きよろきよろあたりを見まわしはじめる。

それから向うに何か見つけ、その方へ一散^{いっさん}に走って行く。

8

父親らしい男の後ろ姿。ただしこれも膝の上まで。少年はこの男に追いつき、しっかりと外套の袖を捉^{とら}える。驚いてふり返つた男の顔は生憎^{あいにく}田舎者^{いなかも}らしい父親ではない。綺麗^{きれい}に口髭^{くちひげ}の手入れをした、都会人らしい紳士である。少年の顔に往来する失望や当惑に満ちた表情。紳士は少年を残したまま、さつさと向うへ行ってしまう。少年は遠い雷^{かみなりもん}門^{もん}を後ろにぼんやり一人佇んでいる。

9

もう一度父親らしい後ろ姿。ただし今度は上半身^{じょうはんしん}。少年はこの男に追いついて恐る恐るその顔を見上げる。彼等の向うには仁王門^{におもん}。

10

この男の前を向いた顔。彼は、マスクに口を蔽^{おお}つた、人間よりも、動物に近い顔をしている。何か悪意の感ぜられる微笑^{びしょう}。

二

仲店の片側。少年はこの男を見送ったまま、
 途方とほうに暮れたよう
 に佇んでいる。父親の姿はどちらを眺めても、
 生憎あいにく目にははい
 らないらしい。少年はちよつと考えた後、
 当のちどあてもなしに歩きはじ
 める。いずれも洋装をした少女が二人、
 彼をふり返ったのも知ら
 ないように。

12

めがね
目金屋の店の飾り窓。
近眼鏡、遠眼鏡、双眼鏡、
かくだいきよう
廓大鏡、顕微鏡、塵除け目金などの並んだ中に西洋人の人
んぎよう
形の首が一つ、目金をかけて頬笑んでいる。その窓の前に佇
うしろすがた
んだ少年の後姿。ただし斜めに後ろから見た上半身。人形の
首はおのずから人間の首に変わってしまう。のみならずこう少年に
話しかける。――

13

「目金を買っておかけなさい。お父さんを見付けるには目金をかけるのに限りますからね。」

「僕の目は病気ではないよ。」

14

斜めに見た造花屋ぞうかやの飾り窓。造花は皆竹籠だの、瀬戸物の鉢だのの中に開いている。中でも一番大きいのは左にある鬼百合おにゆりの花。飾り窓の板硝子ガラスは少年の上半身を映しはじめる。何か幽霊のようにぼんやりと。

15

飾り窓の板硝子越しに造花を隔てた少年の上半身。少年は板硝子に手を当てている。そのうちに息の当るせいか、顔だけぼんやりと曇ってしまう。

16

飾り窓の中の鬼百合の花。ただし後ろは暗である。鬼百合の花の下に垂れている蒼^{つぼみ}もいつか次第に開きはじめる。

17

「わたしの美しさを御覧なさい。」

「だってお前は造花じゃないか？」

18

角^{かど}から見た煙草屋の飾り窓。巻煙草の缶^{かん}、葉巻の箱、パイプなどの並んだ中に斜^{ふた}めに札^{ふだ}が一枚懸っている。この札に書いてあるのは、——「煙草の煙は天国の門です。」徐^{おもむ}ろにパイプから立ち昇^{のぼ}る煙。

19

煙の満ち充ちた飾り窓の正しょうめん面。少年はこの右に佇たたずんでいる。
ただしこれも膝の上まで。煙の中にはぼんやりと城が三つ浮かび
はじめる。城は Three Castles の商標を立体にしたものに近い。

20

それ等の城の一つ。この城の門には兵卒が一人銃を持って佇
んでいる。そのまた鉄格子てつごうしの門の向うには棕櫚しゅろが何本もそよいで
いる。

この城の門の上。そこには横にいつの間にかこう云う文句が浮かび始める。――

「この門に入るものは英雄となるべし。」

こちらへ歩いて来る少年の姿。前の煙草屋の飾り窓は斜めに少年の後ろに立っている。少年はちよつとふり返って見た後、さつさとまた歩いて行ってしまう。

23

吊り鐘つがねだけ見える鐘楼しゅろうの内部。撞木しゅもくは誰かの手に綱を引かれ、徐ろおもむに鐘を鳴らしはじめる。一度、二度、三度、——鐘楼の外は松の木ばかり。

24

斜めに見た射撃屋しゃげきやの店。的まとは後ろに巻煙草の箱を積み、前に博多はかたにんぎよう人形を並べている。手前に並んだ空気銃の一行。人形の

一つはドレスをつけ、扇を持った西洋人の女である。少年は怯おず怯おずこの店にはいり、空気銃を一つとり上げて全然無分むぶんべつ別にま狙ねらう。射撃屋の店には誰もいない。少年の姿は膝の上まで。

25

西洋人の女の人形。人形は静かに扇をひろげ、すっかり顔を隠してしまふ。それからこの人形に中あたるコルクの弾丸たま。人形は勿論仰向あおむけに倒れる。人形の後ろにも暗のあるばかり。

26

前の射撃屋の店。少年はまた空氣銃をとり上げ、今度は熱心に^{まと}的を狙う。三発、四発、五発、——しかし的は一つも落ちない。少年は^し渋^しぶ^し銀貨を出し、店の外へ行つてしまう。

27

始めはただ薄暗い中に四角いものの見えるばかり。その中にこの四角いものは突然電燈をともしたと見え、横にこう云う字を浮かび^{あが}上らせる。——上に「公園六区^{ろくく}」下に「夜警詰所^{やけいづめしよ}」。上のは黒い中に白、下のは黒い中に赤である。

劇場の裏の上部。火のともった窓が一つ見える。まっ直に雨樋いをおろした壁にはいろいろのポスタアの剥はがれた痕あと。

この劇場の裏の下部かぶ。少年はそこに佇たたずんだまま、しばらくはどちらへも行ゆこうとしない。それから高い窓を見上げる。が、窓には誰も見えない。ただ逞たくましいブルテリアが一匹、少年の足もとを

通って行く。少年の匂においを嗅かいで見ながら。

30

同じ劇場の裏の上部。火のともった窓には踊り子が一人現れ、冷淡に目の下の往来を眺める。この姿は勿論もちろん逆光線のために顔などははっきりとわからない。が、いつか少年に似た、可憐かれんな顔を現してしまう。踊り子は静かに窓をあけ、小さい花束はなたばを下に投げる。

31

往來に立つた少年の足もと。小さい花束が一つ落ちて来る。少年の手はこれを拾う。花束は往來を離れるが早いのか、いつか茨いばらの束に変わっている。

32

黒い一枚の掲けい示じ板ばん。掲示板は「北の風、晴」と云う字をチョオクに現している。が、それはぼんやりとなり、「南の風強かるべし。雨模様」と云う字に変わってしまう。

33

ななめ
 斜に見た標札屋の露店、天幕の下に並んだ見本は徳川家
 康、二宮尊徳、渡辺華山、近藤勇、近松門左衛門
 などの名を並べている。こう云う名前もいつの間にか有り来りの
 名前に変つてしまう。のみならずそれ等の標札の向うにかすかに
 浮んで来る南瓜畠……

34

池の向うに並んだ何軒かの映画館。池には勿論電燈の影が幾つ

ともなしに映っている。池の左に立った少年の上半身じょうはんしん。少年の帽は咄嗟とつさあいだの間に風のために池へ飛んでしまう。少年はいろいろあせった後のち、こちらを向いて歩きはじめる。ほとんど絶望に近い表情。

35

カッフエの飾り窓。砂糖の塔、生菓子なまがし、麦藁むぎわらのパイプを入れた曹達水ソオダすいのコップなどの向うに人かげが幾つも動いている。少年はこの飾り窓の前へ通りかかり、飾り窓の左に足を止めてしまう。少年の姿は膝の上まで。

36

このカツフェの外部。夫婦らしい中年の男女なんによが二人硝子戸ガラスの中へはいって行く。女はマントルを着た子供を抱だいている。そのうちにカツフェはおのずからまわり、コック部屋の裏を現わしてしまう。コック部屋の裏には煙突えんとつが一本。そこにはまた労働者が二人せつせとシャベルを動かしている。カンテラを一つともしたまま。……

37

テエブルの前の子供椅子いすの上に上半身を見せた前の子供。子供はにこにこ笑いながら、首を振ったり手を挙げたりしている。子供の後ろには何も見えない。そこへいつか薔薇ばらの花が一つずつ静かに落ちはじめる。

38

斜めに見える自動計算器。計算器の前には手が二つしきりなしに動いている。勿論女の手に違いない。それから絶えず開かれる抽斗ひきだし。抽斗の中は錢ぜにばかりである。

39

前のカツフェの飾り窓。少年の姿も変りはない。しばらくの後、少年は徐ろ^{おもむ}に振り返り、足早^{あしばや}にこちらへ歩いて来る。が、顔ばかりになった時、ちよつと立ちどまつて何かを見る。多少驚きに近い表情。

40

人だかりのまん中に立った糶^せり商人^{あきゆうど}。彼は呉服^{ごふく}ものをひろ

げた中に立ち、一本の帯をふりながら、熱心に人だかりに呼びかけている。

41

彼の手を持った一本の帯。帯は前後左右に振られながら、片はしを二三尺現している。帯の模様は廓^{かくだい}大した雪片^{せつぺん}。雪片は次第にまわりながら、くるくる帯の外へも落ちはじめ。

42

メリヤス屋の露店^{ろてん}。シャツやズボン下を吊^つつた下に婆^{ばあ}さんが一
人行火^{あんか}に当っている。婆さんの前にもメリヤス類。毛糸の編みも
の^{まじ}も交^{まじ}っていないことはない。行火の裾^{すそ}には黒猫が一匹時々前足
を嘗^なめている。

43

行火の裾に坐っている黒猫。左に少年の下^{かはんしん}半身も見える。黒
猫も始めは変りはない。しかしいつか頭の上に流蘇^{ふさ}の長いトルコ
帽をかぶっている。

44

「坊ちゃん、スウエエタアを一つお買いなさい。」

「僕は帽子さえ買えないんだよ。」

45

メリヤス屋の露店を後ろにした、疲れたらしい少年の上半身^{じょうはんし}。少年は涙を流しはじめる。が、やっと氣をとり直し、高い空を見上げながら、もう一度こちらへ歩きはじめる。

46

かすかに星のかがやいた夕空。そこへ大きい顔が一つおのずからぼんやりと浮かんで来る。顔は少年の父親らしい。愛情はこもっているものの、何か無限にも悲しい表情。しかしこの顔もしばらくの後、霧のようにどこかへ消えてしまう。

47

縦^{たて}に見た往来。少年はこちらへ後ろ^{うし}を見せたまま、この往来を歩いて行く。往来は余り人通りはない。少年の後ろから歩いて行

く男。この男はちよつと振り返り、マスクをかけた顔を見せる。
少年は一度も後ろを見ない。

お

斜めに見た格子戸造りの家の外部。家の前には人力車じんりきしゃが三台
後ろ向きに止まっている。人通りはやはり沢山ない。角隠つのかくしを
つけた花嫁はなよめが一人、何人かの人々と一しよに格子戸を出、静か
に前の人力車に乗る。人力車は三台とも人を乗せると、花嫁を先
に走って行く。そのあとから少年の後ろ姿。格子戸の家の前に立
った人々は勿論少年に目もやらない。

49

「XYZ会社特製品、迷い子、文芸的映画」と書いた長方形の板。これもこの板を前後にしたサンドウィッチ・マンに変ってしまう。サンドウィッチ・マンは年をとっているものの、どこか仲なかみせ店を歩いていた、都会人らしい紳士に似ている。後ろは前よりも人通りが多い、いろいろの店の並んだ往来。少年はそこを通りかかり、サンドウィッチ・マンの配くばっている広告を一枚貰って行く。

50

縦に見た前の往来。松葉杖をついた癪兵^{はいへい}が一人ゆつくりと向うへ歩いて行く。癪兵はいつか駝鳥^{だちよう}に変わっている。が、しばらく歩いて行くうちにまた癪兵になってしまう。横町^{よこちょう}の角^{かど}にはポストが一つ。

51

「急げ。急げ。いつ何時^{なんどき}死ぬかも知れない。」

52

往來の角^{かど}に立っているポスト。ポストはいつか透明になり、無数の手紙の折り重なった円筒の内部を現して見せる。が、見る見る前のようにただのポストに変わってしまう。ポストの後ろには暗のあるばかり。

53

斜めに見た芸者^{げいしや}屋町^{やまち}。お座敷へ出る芸者が二人ある御神燈^{ごしんとう}のともった格子戸^{こうしど}を出、静かにこちらへ歩いて来る。どちらも何^{なん}の表情も見せない。二人の芸者の通りすぎた後^{のち}、向うへ歩いて行^ゆ

く少年の姿。少年はちよつとふり返つて見る。前よりもさらに寂しい表情。少年はだんだん小さくなつて行く。そこへ向うに立つていた、背の低い声色遣いが一人やはりこちらへ歩いて来る。彼の目のあたりへ近づいたのを見ると、どこか少年に似ていないことはない。

54

大きい針金の環のまわりにぐるりと何本もぶら下げたかもじ。かもじの中には「すき毛入り前髪立て」と書いた札も下つてゐる。これ等のかもじはいつの間にか理髪店の棒に変わってしまう。

棒の後ろにも暗のあるばかり。

55

理髪店の外部。大きい窓硝子の向うには男なん女にょが何人も動いて
いる。少年はそこへ通りかかり、ちよつと内部を覗のぞいて見る。

56

頭を刈かっている男の横顔。これもしばらくたつた後、大きい針
金の環わにぶら下げた何本かのかもじに変わってしまう。かもじの中

に下った札ふだが一枚。札には今度は「入れ毛」と書いてある。

57

セセツション風に出来上った病院。少年はこちらから歩み寄り、石の階段を登ゆつて行く、しかし戸の中へはいつたと思うと、すぐにまた階段を下くだつて来る。少年の左へ行のちつた後、病院は静かにこちらへ近づき、とうとう玄関だけになつてしまふ。その硝子戸ガラスどを押しあけて外へ出て来る看護婦かんごふが一人。看護婦は玄関に佇たたずんだまま、何か遠いものを眺めている。

58

膝の上に組んだ看護婦の両手。前になった左の手には婚約の指環が一つはまっている。が、指環はおのずから急に下へ落ちてしまふ。

59

わずかに空を残したコンクリイトの塀。これもおのずから透とうめ明になり、鉄格子てつこうしの中に群むらつた何匹かの猿を現して見せる。それからまた塀全体は操あやつり人形にんぎようの舞台に変わってしまう。舞台

はとにかく西洋じみた室内。そこに西洋人の人形が一つ怯おず怯おずあたりを窺うかがっている。覆ふくめん面をかけているのを見ると、この室へ忍びこんだ盗ぬすびと人らしい。室の隅には金庫が一つ。

60

金庫をこじあけている西洋人の人形。ただしこの人形の手足についた、細い糸も何本かははつきりと見える。……

61

斜めに見た前のコンクリートの塀。塀はもう何も現していない。そこを通りすぎる少年の影。そのあとから今度は背むしの影。

29

前から斜めに見おろした往来。往来の上には落ち葉が一枚風に吹かれてまわっている。そこへまた舞い下^{さが}つて来る前よりも小さい落葉が一枚。最後に雑誌の広告らしい紙も一枚翻^{ひるがえ}つて来る。紙は生^{あいにく}憎引き裂^さかれているらしい。が、はつきりと見えるのは「生活、正月号」と云う初号活字である。

大きい常磐木ときわぎの下にあるベンチ。木々の向うに見えているのは
 前の池の一部らしい。少年はそこへ歩み寄り、がっかりしたよう
 に腰をかける。それから涙を拭ぬぐいはじめる。すると前の背むしが
 一人やはりベンチへ来て腰をかける。時々風に揺ゆれる後うしろの常磐
 木。少年はふと背むしを見つめる。が、背むしはふり返りもしな
 い。のみならず懐ふところから焼き芋を出し、がつがつしているように食
 いはじめる。

焼き芋^{いも}を食っている背むしの顔。

95

前の常磐木^{ときわぎ}のかげにあるベンチ。背むしはやはり焼き芋を食っている。少年はやっと立ち上り、頭を垂れてどこかへ歩いて行く^{ゆく}。

96

斜めに上から見おろしたベンチ。板を透かしたベンチの上には

墓口^{がまぐち}が一つ残っている。すると誰かの手が一つそつとその墓口をとり上げてしまう。

67

前の常磐木のかげにあるベンチ。ただし今度は斜めになっている。ベンチの上には背むしが一人墓口の中を^{しら}検べている。そのうちにつか背むしの左右に背むしが何人も現れはじめ、とうとうしまいにはベンチの上は背むしばかりになってしまう。しかも彼等は同じようにそれぞれ皆熱心に墓口の中を^{しら}検べている。互に何か話し合いながら。

68

写真屋の飾り窓。男女なんによの写真が何枚もそれぞれ額縁がくぶちにはいつて懸かつてかいる。が、それ等の男女の顔もいつか老人に変わつてしまふ。しかしその中にたった一枚、フロック・コウトに勲章をつけた、顴髭あごひげのある老人の半身だけは変らない。ただその顔はいつの間にか前の背むしの顔になつてまいる。

69

横から見た観音堂。^{かんのんどう}少年はその下を歩いて行く。観音堂の上には三日月が一つ。^{みかづき}

70

観音堂の正面の一部。ただし扉はしまっている。その前に礼拝している何人かの人々。少年はそこへ歩みより、こちらへ後ろを見せたまま、ちよつと観音堂を仰いで見る。それから突然こちらを向き、さつさと斜めに歩いて行ってしまう。

71

斜めに上から見おろした、大きい長方形の手水鉢^{ちようずばち}。柄杓^{ひしやく}が何本も浮かんだ水には火^ほかげもちらちら映っている。そこへまた映って来る、憔悴^{しょうすい}し切った少年の顔。

72

大きい石燈籠^{いしどうろう}の下部。少年はそこに腰をおろし、両手に顔を隠して泣きはじめる。

73

前の石燈籠の下部の後ろ。男が一人佇^{たたず}んだまま、何かに耳を傾けている。

74

この男の上半身。もっとも顔だけはこちらを向いていない。が、静かに振り返ったのを見ると、マスクをかけた前の男である。のみならずその顔もしばらくの^{のち}後、少年の父親に変わってしまう。

75

前の石燈籠の上部。石燈籠は柱を残したまま、おのずから炎になつて燃え上つてしまふ。炎の下火したびになつた後のち、そこに開き始める菊の花が一輪。菊の花は石燈籠の笠よりも大きい。

76

前の石燈籠の下部。少年は前と変りはない。そこへ帽を目深まぶかにかぶつた巡査じゆんさが一人歩みより、少年の肩へ手をかける。少年は驚いて立ち上り、何か巡査と話をする。それから巡査に手を引かれたまま、静かに向うへ歩いて行く。

77

前の石燈籠の下部の後ろ。今度はもう誰もいない。

78

前の仁王門におうもんの大提灯おおじょうちん。大提灯は次第に上へあがり、前のように仲店なかみせを見渡すようになる。ただし大提灯の下部だけは消え失うせない。

(昭和二年三月十四日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiya

校正：かとうかおり

1998年4月20日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

浅草公園

——或シナリオ——

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 芥川龍之介
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>